

# ヒストモナス性盲腸炎

鹿児島大学農学部家畜病理学教室

第10回獣医病理学研修会標本 No.139



ホロホロ鳥はキジ科に属し、家畜としては稍々小型で小紋のような斑点のある美しい鳥で、原産地はアフリカの西部である。わが国にも早くから輸入され幾分改良も加えられたが繁殖率の悪い点から実用的でなく、専ら動物園、遊園地で飼育されている。鹿児島県某遊園地で多数のホロホロ鳥が飼育されている。同園産の卵から孵化されたホロホロ鳥が5~7カ月令で76羽中10羽斃死した。それらの中7カ日令の2羽が食欲不振に陥り、元気がなくなり斃死したので2羽の剖検を行なったが、何れも同じ所見で栄養不良、盲腸は両側共に尖端から基部に至る迄著しく大し、且つ硬固で盲腸は両側共小腸と癒着し、剝離困難である。盲腸の断面は腸壁の肥厚著しく、内腔は狭小となり、盲腸内容は正常の内容物殆んどなく、粥状の壊死物が認められ、粘膜は黄灰色を呈し、偽膜を形成している。肝、脾は小さく、腺胃、小大腸その他の臓器は特に異状は認められない。写真Aは盲腸粘膜の組織のH-E染色であるが粘膜、粘膜筋枝は殆んど壊死し、辛うじて腺組織の残存から粘膜であることが窺える。粘膜下織は円形細胞浸潤、肉芽の増殖が顕著である。壊死は所によっては粘膜下織から筋層に迄達している。筋層から腸漿膜にかけて肉芽の増殖、円形細胞の浸潤も又著明でところによっては巨大細胞の出現も見られる。粘膜か

ら筋層にかけて広い分野の組織に円形空隙が生じ、中に好酸性の円形(7~10 $\mu$ )の小体が認められる(写真B)、これらの小体はPAS陽性でヒストモナスと考えられる。これが本病の病原体であることは明白である。これを要するに本病変は壊死、増殖性の変化が強く変状は陳旧である。興味あることは出血性、化膿性の変化に乏しいことである。これらの変状はヒストモナス性の病変として特徴づけられよう。写真A.B.から本病変はヒストモナス性盲腸炎と診断されよう。従来ヒストモナスは七面鳥、鶏に病原性が強く、屢々肝臓にも盲腸同様の病変を作るが本例は肝臓に病変は見出せなかった。発病状況、病変等からホロホロ鳥はヒストモナスに対し、七面鳥、鶏より抵抗性が強いように思える。ヒストモナスは盲腸虫により媒介されることが知られているが、ヒストモナスによる盲腸病変が強くなり、義膜、壊死物質が見られる場合却って盲腸虫の寄生を見ないことが多いといわれているが本例も盲腸内に盲腸虫を見出せなかった。同群中のホロホロ鳥が他の疾病で斃死したが、剖検で多数の盲腸虫の寄生が見られたので同群は明かに盲腸虫の感染があり、これによるヒストモナスの感染があったことが充分考えられる。